東京大学大学院人文社会系研究科

「次世代人文社会学育成プログラム」による海外派遣

帰国報告

2012年4月9日提出

１． 派遣生の基本情報

・氏名：武田 はるか（たけだ はるか）

・所属：東京大学大学院人文社会系研究科フランス語フランス文学研究室（PD）

・派遣形態：平成22年度冬学期・個人派遣

２． 研究テーマ

「文学と生 —— 現代作家ベケット、デュラス、サロートの作品における声の体験をめぐって」

３． 派遣先の基本情報

・都市・国：パリ・フランス

・利用した研究機関：フランス国立図書館（Bnf）、フランス国立視聴覚研究所（Ina）等。

・派遣期間：2011年4月1日～2012年3月31日

４． おもな研究成果

① 当初の計画の概要

ベケット、デュラス、サロートの作品世界は、一見すると共通点がないようにみえるが、創作をとおして声の問題を主題化し、次第に発声性（vocalité）に満たされたあらたなエクリチュールへと向かっていったという点で類似している。かれらの声をめぐる表現の多様な試みが、かれらの文学、わたしたちの文学の体験、そしてまた文学の未来に何をもたらしたのかを考察するために、フランスの研究機関所蔵の資料を積極的に活用しながら、かれらの声の文学（小説、劇、映像作品等）を多角的に分析していく。

② 研究の成果

各研究機関の利用によって、テクスト資料のみならず、映像資料やラジオ音源を検討することができた。その際、録音技術と文学作品との歴史的・技術的関係をあつかった資料を調査したことで、声を物質的に使用する作品がつくられるようになった歴史的背景を視野に入れた考察ができた。また、本研究があつかう作家たちの劇作品は、今なお劇場において上演されているため、その現状を実地で体験し、調査することができた。なお、本研究の主題は、デリダやブランショ、アガンベンらヨーロッパの思想家たちが、ギリシャ哲学以来の哲学的な問題として、存在論的な問題、倫理的な問題を提起しながら、とりわけ七十年代以降に再検討した主題でもあり、ヨーロッパにおけるかれらの仕事を検討し学ぶことで、考察をふかめるための多くの示唆をえた。また、パリ第八大学教授でフランス大学研究員（IUF）のブリュノ・クレマン教授から多くの貴重な助言を受けることができた。日本フランス語フランス文学会秋季大会において、サロートの劇作品にかんする発表を、本研究の成果の一部として行った。

③ 今後の展望

三人の同時代の作家たちによる多様なジャンルの作品をあつかった本研究の成果を、個別作家研究およびテーマ研究の成果として、さまざまなかたちで発表していきたい。また、ほかの同時代の作家たちの作品にも分析の対象をひろげ、本研究のあつかう声の問題との差異あるいは相似を明確にしながら、なぜ現代文学において声が問題となったのかをあらためて問いなおし、声をめぐる作家たちのさまざまな試みが、今日の作家たちに、どのような影響をおよぼし、文学をどこへ導いたのかをひきつづき検討し、それを通して、わたしたちの生における文学のありかを問うことをつづけたい。